教育におけるジェンダー差：性別構成の影響

井上ちひろ

先進国では女性の教育水準は男性と同等かそれ以上になっている一方で、入学難易度が高い大学や理工系学部において女子学生比率が低いことが指摘されている。このような進学選択の差は、卒業後の労働市場における成果の差だけでなく、社会全体における人的資源の活用にも関わる重要な問題である。本報告では、進学選択におけるジェンダーギャップに関する研究を概観したうえで、報告者が進めている一連の実証研究を紹介する。

教育を人的資本への投資と捉える伝統的な考え方では、教育によって将来得られる賃金リターンと教育に要するコストが進学選択の主要な決定要因となる。一方、近年では、スケジュールの柔軟性など仕事の賃金以外の特性、結婚や家族形成への期待、在学中のコースワークの楽しさなど、教育のリターンやコストに影響する非金銭的要素の重要性を指摘する研究が進展している。これらの要素についての「主観的期待」と、それらをどの程度重視するかという「選好」の男女差はいずれも、進学選択の男女差を生む要因となりうる。

これらの「主観的期待」や「選好」の形成プロセスに関わる重要な要因として、本報告では特に学校におけるピアの性別構成を取り上げ、報告者が日本のデータを用いて実施した研究を紹介する。中心的には、小学校における児童の男女比率が学力に与える影響に関する研究について報告する。時間が許せば、その他の進行中の研究にも触れ、進学選択の男女差との関連について整理する。